

# 西明寺三重塔四天柱絵金剛界諸菩薩像

関 口 正 之

はじめに

西明寺三重塔には、重要文化財に指定されている栃木県の西明寺の塔と、国宝に指定されている滋賀県の西明寺の塔とがあるが、本稿に取上げるのは滋賀県犬上郡甲良町池寺に在る天台宗の寺院、竜応山西明寺の国宝三重塔である。

滋賀県西明寺の三重塔初層内部は、中央の四天柱に囲まれる須弥壇には、現在、鎌倉時代の造立と推定されている金剛界大日如来の木像一尊のみが西方に向けて安置され、四天柱には金剛界の諸菩薩と迦陵頻伽の画像、側壁には法華経変相図、扉には天部画像が描かれるのを始め、長押から支輪・天井に至るまで須弥壇と床を除くすべての表面が濃厚な彩色により飾られている。特に四方の側壁八面全部に表わされた法華経変相は、三重塔に描かれる我国唯一の遺例として著名である。塔の建立年代も建立に至る事情も不明であるが、建築様式の上からは、鎌倉時代後期における和様三重塔の典型、中世建築彩色の代表作例として早くから注目されている<sup>(1)</sup>。彩色部分は側壁、扉、四天柱にあっては、人の手が触

れない上部や、床に近い下部の彩色は残るが、壁画中央や四天柱中段、特に本尊の前方二柱の内側等は彩色の剝落が甚だしく、一見すると彩色に差がある様に見られるが表現の点からは同時期の作と考えられる。そして此等の絵の製作は、三重塔建立と同時期、鎌倉時代後期と推定されるので、建立当初の壁画・扉絵・四天柱絵であると言えるであろう。概して彩色の剝落した個所が多く、四天柱では尊像の像形が全く不明であるものも少なくないのにも拘わらず、全体として見ると濃彩を対比させる華麗な色調、ことに四天柱の諸尊は裳に様々な文様と彩色とを描き分け切金を用い多色の蓮弁をもつ蓮華座に表わすなど、当初の絢爛たる彩色を充分に推測することが出来る。

此等の壁画画、柱絵は絵画資料として重要な作例であるが、絵画史の上から問題を考察した論者は未だ発表されておらず、また此等について述べたものも少ない。此等の絵に言及するものの大部分は、建造物としての西明寺三重塔の解説に付随して末尾に記されるもので、絵画作品としての特色は未だ検討されるに至っていない。但し此等の絵の主題については発表順に挙げると佐和隆研博士<sup>(2)</sup>、石田茂作博士<sup>(3)</sup>、田中日佐夫氏<sup>(4)</sup>

の三氏が触れておられるが、初めの佐和博士が最も詳しく紹介しておられる。

扉絵は、後補である南扉には絵がなく、其以外の三方の六面に一尊ずつ、合計六尊の天部立像が描かれており、尊容から見て南方の二面を含めて護世八方天が描かれていたと推定されている。各扉の両側にある八面の壁画の中には短冊形があり法華経廿八品の品名が記されている。ただし、廿八品各々のうち経文の中のどの部分が取上げられ如何なる絵画的な特色を示すものか画題と表現については未だ発表されてはいないの

で、此の問題の検討は次の機会に譲ることにするが、いずれにせよ壁画の主題が法華経変相であることだけは明白である。従って扉絵と壁画の主題については上記の三氏とも一致しているが、四天柱絵の諸尊については三氏の記述に差が見られる。即ち、田中氏は此等が「菩薩像」であること、石田博士は「金剛界三十二菩薩」であることを指摘し、佐和博士は両氏より詳しく紹介され「金剛界十六大菩薩・四摂菩薩・八供養菩薩」が表わされていることを指摘し、更に四神が描かれている可能性があり調査が必要であると述べておられる。しかし、現在までのところ、四天柱絵諸尊の尊名と其が描かれている位置については、未だ正確には確認されていない。そこで今回は、西明寺三重塔初層の壁画・扉絵・柱絵の表現の特色を考察するのに先立ち、基礎的作業として四天柱絵諸尊の図像学的検討による尊名の比定を試み、更に各尊像と其等が描かれる柱上の位置との関係を考察することに問題の焦点を置いて諸尊配置のルールを推察したものである。

## 一 尊像の位置

各柱とも素木の表面に黒漆を塗り、その上に更に白土と思われる白色を塗重ねて画面の下地としている。柱絵が描かれる部分は上中下の三段に分けられ、下段の部分に勾欄と須弥壇が造られる。上・中二段には各四尊ずつの諸尊像、下段には迦陵頻伽一体が配置され、段の境は宝相華文の文様帯により仕切られる。福山市にある明王院の国宝五重塔四天柱の場合は文様帯の部分に帯金具が使われ、金具の上下の縁は半球状の飾り鉾が一周しているが、西明寺の場合は文様帯の上下の縁は黒帯の中に金色の連珠文が描かれている。

挿図1 西明寺三重塔西北柱  
上段北面

尊像は、両段とも四つつつ配置された黄色の円相の中に、蓮華座上の坐像として表わされる。各段の四尊は二尊ずつ上下に分かれ、上部の二尊は東西の位置に、下部の二尊は南北の位置に背中合わせに配置されている。従って四天柱に描かれる尊像は、一柱に八尊、四天柱合計で三十二尊が、東西南北の四方に一柱で上下に二尊ずつ整然と配置されている。各円相間をつなぐ地の部分(挿図1)は、緑色の上に切金線を交叉させ其間に菱形の切金を置いたものを地文様としている。これは曼荼羅その他の仏画に地文様として見られるものである。尚、東北柱(図版V)における円相(東北柱上段南面)の径は縦28・1

糶、横28・0糶あり、他の三十一尊も此と大体同じ大きさである。

## 二 諸尊の像形

柱絵諸尊の尊名については前掲の佐和博士の論文で既に大凡の推定がなされている。それによると、柱を上中下の三段に区劃した上段には金剛界曼荼羅成身会中の四仏の周圍に配置される十六大菩薩を描き、中段には同じく金剛界曼荼羅の四摂菩薩（金剛鉤・索・鎖・鈴菩薩）と八供養菩薩（金剛嬉・鬘・歌・舞・焼香・華・燈・塗香菩薩）を描き、更に四神（地・水・火・風神）を加えていると推定され、下段には迦陵頻伽が一体描かれる。上段の場合は三重塔の正面（西側）から入り向って右側の柱に阿闍如来の四親近菩薩（金剛薩埵・王・愛・喜菩薩）、同じく左側の柱には宝生如来の四親近菩薩（金剛宝・光・幢・笑菩薩）、左奥の柱には無量寿如来の四親近菩薩（金剛法・利・因・語菩薩）、右奥の柱には不空成就如来の四親近菩薩（金剛業・護・牙・拳菩薩）を描いていると述べておられるが、三十二の個々の尊名は検討されていないので、此処では諸尊の像形持物手勢身色などの図像学的特色に基づき尊名を比定することを試みる。

尊名の比定に際し、三十二の尊像が金剛界曼荼羅の諸尊であると前述の三氏により推定されている上に、竜応山西明寺が天台宗の寺院として現在に至っていることを考慮して、空海請来になる根本の両界曼荼羅の姿を伝える神護寺蔵の高雄曼荼羅、天台宗において胎蔵界曼荼羅に対するものとして用いられる金剛界八十一尊曼荼羅等に見られる金剛界諸尊と西明寺柱絵の像形を比較する。金剛界諸尊の尊容に関しては、

当研究所の柳沢孝氏が青蓮院伝来の白描金剛界諸尊図様の研究を発表された際、五部心観、根津美術館蔵金剛界八十一尊曼荼羅、神護寺蔵高雄曼荼羅における金剛界三十七尊の尊容を比較した対照表を掲げておられるので、この労作に依拠し、更に宅磨為遠筆の伝承を持ち現在は諸家に分蔵されている「金胎仏画帖」の尊容と注記、金剛界諸尊の尊容を説く『秘蔵記』の記述、平安時代に石山寺淳祐が撰述した『金剛界七集』の記述を、四天柱絵の尊像と逐一比べてみる。尚、高雄曼荼羅の尊容は仁和寺版の高雄曼荼羅白描図像を参照した。又、「金胎仏画帖」の図像は、当東京国立文化財研究所前所長の田中一松先生が指摘された通り、現存の曼荼羅諸作品のどの系統にも帰着させ難いものであるが、冠や冠繪、腕釧の形式が西明寺の像に近いので比較資料として用いたものである。

### 〔西南柱〕

#### 1 上段東面（挿図2-1）

二手とも拳を作り胸前に其を交叉させる姿に表わした肉色の身色をもつ尊像であるから、金剛界曼荼羅成身会東輪のうち阿闍如来の向って右方に描かれる金胎王菩薩の像に一致する。拳にした手の掌を外に向ける形は金胎仏画帖の場合が手首を捻って拳の甲を外に向けているのとは異なり、高雄曼荼羅と同形であり、秘蔵記に言う像容身色にも一致する。

#### 2 上段西面（挿図2-2）

左手は五鈷鈴を持ち左膝上に置き、右手は五鈷杵を胸前に把る肉色の尊形であるので、成身会東輪の阿闍如来上方に居る金剛薩埵像であ

〔上段〕



(10) 上段西面

(9) 上段東面

(2) 上段西面

(1) 上段東面



(12) 上段北面

(11) 上段南面

(4) 上段北面

(3) 上段南面



(14) 中段西面

(13) 中段東面

(6) 中段西面

(5) 中段東面

〔中段〕



(16) 中段北面

(15) 中段南面

(8) 中段北面

(7) 中段南面

〔西北柱〕

〔西南柱〕



〔上段〕

(26) 上段西面

(25) 上段東面

(18) 上段西面

(17) 上段東面

(28) 上段北面

(27) 上段南面

(20) 上段北面

(19) 上段南面

〔下段〕

(30) 中段西面

(29) 中段東面

(22) 中段西面

(21) 中段東面

(32) 中段北面

(31) 中段南面

(24) 中段北面

(23) 中段南面

〔東南柱〕

〔東北柱〕

る。高雄本、金胎仏画帖の像形に一致し、同帖や秘蔵記に言う身色とも同じである。

### 3 上段南面 (挿図 2-3)

襪褌衣を着け、左手は拳を作り胸前に置き、右手は右膝に伸ばして触地印とする暗青色の像である。像形は高雄本の成身会中輪において大日如来の前方に居る金剛波羅蜜菩薩と同じであり、金胎仏画帖の像は左手は左膝上に置いて形、秘蔵記に言う「左手蓮華上在篋」の像形とは異なるが、身色は秘蔵記の「黒青色」、金胎仏画帖の「青色」にほぼ一致しているので、金剛波羅蜜菩薩とすることが出来よう。

### 4 上段北面 (挿図 2-4)

光背外縁と蓮弁の先端の一部を残すほかは尊像の大部分が剝落しているので像形は不明であるが、肉色の左手が持つ鏑矢の矢尻が僅かに残るので、成身会東輪阿闍如来の向って左に居る金剛愛菩薩であると考えられる。身色は秘蔵記も金胎仏画帖も共に「肉色」とあり、本像と一致している。

### 5 中段東面 (挿図 2-5)

両拳を胸前で向い合わせる肉色の尊像であるから成身会東輪阿闍如来の下方に居る金剛喜菩薩である。像形・身色とも高雄本・金胎仏画帖・秘蔵記の記述に一致する。

### 6 中段西面 (挿図 2-6)

左手は拳を伏せて左腹前に置き、右手は金剛鉤の柄を把る肉色の尊像であるから、像形から見れば四摂菩薩(東)の金剛鉤菩薩であるが、本図の金剛鉤の形状は高雄本成身会の同像の場合と異なり、微細会や

理趣会に表わされる同像の持物と同じ三鈷鉤として描かれている。此は金胎仏画帖の金剛鉤菩薩の持物と同じであるので、秘蔵記も金胎仏画帖もともに身色を「黒色」と記述する註記とは異なるが、金剛鉤菩薩として誤まりはないであろう。

### 7 中段南面 (挿図 2-7)

両手とも拳を伏せて脇腹に構える肉色の尊像であるから、像形から成身会内四供養菩薩のうち向って左下(東南)に位置する金剛嬉菩薩である。しかし、本図は高雄本の像の如く大日如来の方に身体を向けず、身色も秘蔵記に註記される黒色とは異なるが、金胎仏画帖の像容は本図と同様に正面向きに表わされ、身色も「白肉色、或本黒色」とあり、西明寺像に近い。

### 8 中段北面 (挿図 2-8)

彩色の剝落が激しく、左膝頭辺の着衣の文様と左胸辺に持物の一部と推測される彩色が僅かに見られるが、尊名の判定は困難である。

〔西北柱〕

### 9 上段東面 (挿図 2-9)

左手は与願印、右手は掌を内に向けて胸前に置き頭を少し右に向けて肉色の尊像である。像形は高雄曼荼羅の金剛界成身会南輪、宝生如来の向って右の金剛宝菩薩のものである。秘蔵記は同菩薩について「肉色左手与願印右手承宝」と記するが、両者とも右手に持物は無い。金胎仏画帖の金剛宝菩薩についての註記は秘蔵記の其と全く同文であるにも拘わらず、図像は左右逆に右手を与願印に描く。金剛界三十七尊の中には与願印の菩薩像は金剛宝菩薩の外には見当たらないの

で、金胎仏画帖では同菩薩の図像は左右を描誤ったものと考え、本像は金剛宝菩薩像を描いたものと考えられる。

10 上段西面（挿図2-10）

右膝に幡幢を立て、右手は肩の高さで、左手は右膝の上で幡の柄に添える緑色の菩薩像である。像形は成身会南輪宝生如来の上に居る金剛幢菩薩である。高雄本と金胎仏画帖の像形と同じである。身色については金胎仏画帖には指示はなく秘蔵記には「肉色」とある点が本像とは異なる。

11 上段南面（挿図2-11）  
（図版I）

彩色の剥落が甚だしく尊形は不明であるが肉色の尊像である。

12 上段西面（挿図2-12）

人指のみを立てた両手の拳を胸前で向い合わせる黄色の尊像であるが、高雄本の金剛界曼荼羅には此の像形の尊像と同形の像は見出せない。秘蔵記の中にも此の像を意味すると考えられる記述は見当たらない。しかし、金胎仏画帖の中の金剛牙菩薩が、本像と同じ像形の図像に描かれており、身色等についての注記も「白黄色二手作拳当臆」と述べられ、図像の像形に一致している。金剛牙菩薩は成身会北輪の不成成就如来の四親近菩薩の一つで、金剛界曼荼羅では同如来の下辺に描かれる。しかし、高雄本に見られぬ像であることは検討を要する。

13 中段東面（挿図2-13）

二手とも拳を耳の側に揚げる肉色の尊像である。像形から見ると成身会東輪宝生如来の向って左に位置する金剛笑菩薩である。此は高雄本と金胎仏画帖の像と同じであり、秘蔵記の記述とも一致する。

14 中段西面（挿図2-14）

左手は拳を伏せ左膝辺に置き右手は胸前に何物かを把む形をした白黄色の尊像である。右肩上方は彩色が剥落し、持物の有無が明瞭ではないが、両手の位置と形、秘蔵記と金胎仏画帖の身色の記述とを合わせ考えると成身会四撰菩薩のうち向って左、即ち南方に位置する金剛索菩薩と考えられる。

15 中段南面（挿図2-15）

彩色は大部分が剥落しており尊容は不明である。

16 中段北面（挿図2-16）

花盤を両手で胸前に捧げる淡黄色の尊像である。高雄本や金胎仏画帖の像形から本像は成身会外四供養菩薩のうち向って左上、即ち西南に位置する金剛華菩薩に相当する。秘蔵記・金胎仏画帖とも身色は「浅黄色」と記す。「浅黄」には淡い黄色の意味もあるので、本図は秘蔵記の記述に一致していると見做すことが出来よう。

〔東北柱〕

17 上段東面（挿図2-17）

蓮華上に篋を載せた蓮華茎を左手で胸前に持ち、右手は金剛剣を右膝上に立てて持つ肉色の尊像である。尊形から判断すると成身会西輪、無量寿如来の向って左に表わされる金剛利菩薩である。像形は高雄本と秘蔵記の記述に一致するのであるが、身色については秘蔵記、

金胎仏画帖とも「金色」としており本図とは異なっている。

18 上段西面（挿図2-18）

左手で腹前の蓮華茎を持ち、胸前に延びて咲く蓮花を右手で開く姿

勢に描く肉色の尊像であるから、成身会西輪の無量寿如来の下方に描かれる金剛法菩薩と考えられる。高雄本、金胎仏画帖の像形にも一致する。肉色の身色も秘蔵記、仏画帖の記述と同じである。

#### 19 上段南面 (挿図2-19)

左手は拳を伏せて左腹前に置き、右手は胸前で掌上に輪宝を載せる肉色の尊像である。像形は高雄本の成身会西輪、無量寿如来の向って右に描かれる金剛因菩薩のものであり、秘蔵記の記述とも一致するが、金胎仏画帖では像容については秘蔵記と同様「肉色左手拳右持輪」と記すが、図像は大形の輪宝を腹前に置き輪宝の両端を両手で把む形に表わされている。

#### 20 上段北面 (挿図2-20) (図版II)

左肩上辺の蓮華上に宝篋を載せた長い蓮華茎を、無量寿印を組んだ臍前の両手に持ち、襪襦衣を着た肉色の身色に表わされる尊像であるから、成身会中輪の四波羅蜜菩薩の中の、大日如来の上方に位置する法波羅蜜菩薩である。高雄本・秘蔵記・金胎仏画帖とも一致する。但し、金胎仏画帖では持物の蓮華を省略して描いていない。

#### 21 中段東面 (挿図2-21)

左手は拳を伏せて左腹部辺に置き、右手は掌を上にして体の外に出し紐状のものを掌に懸ける肉色の尊像である。持物を金剛鎖と考えれば、高雄本にも金胎仏画帖にも本図と同形の尊像に表わされている、成身会四摂菩薩のうち上方(西方)に位置する金剛鎖菩薩である。

持物の金剛鎖は、高雄本も仏画帖でも一本の鎖の両端に三鈷の留金具を表わしているが、本図では単なるロープを描いて様に見える。身色

は秘蔵記では本図と同様に肉色であるが、金胎仏画帖は「青色取鎖或本肉色左手拳右手鎖」と記し、別説として肉色の像を取上げている。

#### 22 中段西面 (挿図2-22) (図版III)

左手は拳とし左腹前に置き、右手は胸前で掌上にして三鈷鈴を載せる肉色の尊像である。両手の形は高雄本の金剛界成身会無量寿如来の上方、金剛語菩薩のものである。同菩薩とすると身色は秘蔵記と金胎仏画帖と同じ肉色であるが、持物は秘蔵記、金胎仏画帖とも如来舌の中に三鈷鈴を表わしたものである。高雄本の持物は本図と同様に三鈷鈴を掌にのせている様に見える。

#### 23 中段南面 (挿図2-23) (図版IV)

柄香炉様の持物を左方に向け、その柄を両手で胸前に捧げ持つ肉色の身色の尊像である。像形から見れば本像は高雄本の成身会外四供養菩薩のうち向って左下(東南隅)の金剛焼香菩薩に近いが、身色の点で秘蔵記も金胎仏画帖もともに「黒色」であると記す。但し仏画帖の像容は両手で香器を捧げており高雄本とは異なっている。

#### 24 中段北面 (挿図2-24)

左手で箆篋を把で右手で弾く白肉色の尊像であるから成身会内四供養菩薩の向って右上(西北隅)に表わされる金剛歌菩薩である。本像の身色は秘蔵記や金胎仏画帖と同じであるが、本像が左方に像身に向けるのに対し秘蔵記と仏画帖の像は右方を向く像に描かれている。

#### 〔東南柱〕

#### 25 上段東面 (挿図2-25)

二手を合掌して頭上に揚げる黄色の像である。像形の点から見ると

成身会北輪不空成就如来の向って左に描かれる金剛業菩薩と考えられるもので、高雄本と金胎仏画帖の双方の金剛業菩薩の尊形に一致する。しかし、身色は秘蔵記や金胎仏画帖に述べる肉色の尊像とは異なり、本像は金色に近い重厚な黄色に彩色されている。

26 上段西面（挿図2-26）

青色の尊像であることは判るが彩色の剥落のため尊容は不明。

27 上段南面（挿図2-27）

左手は胸前で蓮華を持ち右手は臂を屈して掌の上に羯磨を載せた、襜褕衣を着た青色の尊像である。これは高雄本の成身会中輪大日如来の向って右に描かれる羯磨波羅蜜菩薩である。身色は秘蔵記や金胎仏画帖に一致するが、仏画帖の図像は註記の内容とは異なり胸前で両拳を向い合わせる像を出している点が本図と異なる。

28 上段北面（挿図2-28）

両手の拳を胸前で向い合わせる青色の尊像である。像形・身色から見て成身会北輪の不空成就如来の向って右に位置する金剛拳菩薩である。高雄本、秘蔵記、金胎仏画帖の像形、彩色とも本像の表現と一致している。

29 中段東面（挿図2-29）

左手は拳を伏せて左腹前に構え、右手は胸前に置く青色の尊像であるが、彩色が剥落していて右手と持物の形状が不明であるので尊名は定め難い。

30 中段西面（挿図2-30）

二手とも拳にし手の甲同士を胸前で合わせる様に揃える白黄色の尊

像である。像形は高雄本の成身会北輪不空成就如来の下方に描かれる金剛牙菩薩と同様である。秘蔵記と金胎仏画帖の同菩薩についての註記も「白黄色二手作拳当臆」とあり全く同文であるが、仏画帖の像形は人指を立てた拳を向い合わせる像で「12 西北柱・上段北面」の像と同形なので既に触れている。この像も金剛牙菩薩とすると西北柱と東南柱の両方に像形の異なる二種の金剛牙像が描かれていることとなる。しかし、金剛界曼荼羅の菩薩像を一堂塔内に描くに当り、金剛牙像のみを二体も表わすことは考えられないので、何れか一方が金剛牙像として描かれたものであろう。本像が金剛牙像でないとすると仏画帖の中にも本像と同形の像はない。高雄本の中に同形の像が見出される本像を金剛牙菩薩と比定しておく。

31 中段南面（挿図2-31）

左手に皿状の器を載せて胸前に捧げ、右手も器に添える位置に描かれる青色の尊像であるが、右手部分は彩色の剥落があつて明瞭ではない。器の上には香炉様の四足の器が表わされている。此の持物は他に例がないが類似の像形の像を挙げると成身会外四供養菩薩の中の向って右下隅に居る金剛塗香菩薩が考えられる。秘蔵記も金胎仏画帖も身色は本図と同様に青色であるとしており、持物の形が特殊であることを除けば高雄本、金胎仏画帖の同菩薩の形姿に近いので本像は金剛塗香菩薩であると考えて誤まりはないであろう。

32 中段北面（挿図2-32）

左手は掌を伏せて左大腿部に向け、右手は掌を内に向けて胸に当てる姿勢の黄色の尊像である。この像形は高雄本、金胎仏画帖の中の成

東 南 柱 (北)	東 北 柱 (西)	西 北 柱 (南)	西 南 柱 (東)	柱		段
				東	西	
25 業 (前)	17 利 (右)	9 宝 (前)	1 王 (右)	東	西	上 部
26 ホ	18 法 (前)	10 幢 (左)	2 薩 (前)	東	西	
27 羯 [北]	19 因 (左)	11 □	3 金 [東]	南	北	下 部
28 拳 (後)	20 法 [西]	12 ハ	4 愛 (左)	東	西	
29 ヘ	21 鎖 (四)	13 笑 (後)	5 喜 (後)	東	西	上 部
30 牙 (左)	22 語 (後)	14 索 (四)	6 鉤 (四)	東	西	
31 塗 (外)	23 焼 (外) ?	15 ニ	7 嬉 (内)	南	北	下 部
32 舞 (内)	24 歌 (内)	16 華 (外)	8 イ	東	西	

表1 西明寺三重塔四天柱絵の金剛界菩薩像配置略表  
(尊名の略称は通途のそれに従う)

身会内四供養菩薩の一つで向って右下に描かれる金剛舞菩薩のものである。身色は本像が黄色に表わすのに対して秘蔵記と仏画帖では「青色」であると記しているが、両手の手勢は金剛界三十七尊の中では同菩薩以外には用いられないので、本像は金剛舞菩薩であると比定出来るよう。

以上の様に、四天柱像の大部分は高雄本系の像形であり、其等は、

〔尊名を比定し得たもの〕

1 高雄本の像形・持物  
に一致し秘蔵記の身色に  
同じもの……………

…………… (1 2 3 4 5 9 13

18 19 20 22 24 27 28 30) 一五

2 高雄本の像形・持物

に一致するが身色が秘蔵

記とは異なるもの……………

…………… (7 10 16 17 23 25 32) 七

3 持物が不鮮明或は形

式が高雄本と異なるが像

形が其に一致するもの……………

…………… (6 14 21 31) 四

〔尊名未定のもの〕

4 像形の点に問題があ

り尊名の比定に検討を要するもの…………… (12) 一

5 彩色の剝落により尊容が不明なもの…………… (8 11 17 26 30) 五

の如く五つに分類出来る。この中で第3の五尊のうち剝落のため持物が不鮮明である一尊を除く三尊と、第4の一尊の合計四尊が、高雄本と一致しない点を持つので西明寺四天柱絵を图像的な面で特色づけているものである。

ここで尊名が判った像を柱別に列記すると次の様になる。

西南柱 成身会中輪四波羅蜜菩薩のうち東方の金剛波羅蜜菩薩。東輪阿

閼如來の四親近菩薩の金剛薩埵菩薩・金剛王菩薩・金剛愛菩薩・金

剛喜菩薩。内四供養菩薩(東南隅)の金剛嬉菩薩。四摂菩薩(東)

の金剛鉤菩薩。

西北柱 成身会南輪宝生如來の四親近菩薩のうち金剛宝菩薩・金剛幢菩

薩・金剛笑菩薩。外四供養菩薩(西南隅)の金剛華菩薩。四摂菩薩

(南)の金剛索菩薩。

東北柱 成身会中輪四波羅蜜菩薩のうち西方の法波羅蜜菩薩。西輪無量

寿如來の四親近菩薩である金剛法菩薩・金剛利菩薩・金剛因菩薩・

金剛語菩薩。内四供養菩薩(西北隅)の金剛歌菩薩。外四供養菩薩

(東南隅)の金剛焼香菩薩。四摂菩薩(西)の金剛鎖菩薩。

東南柱 成身会中輪四波羅蜜菩薩のうち北方の羯磨波羅蜜菩薩。北輪不

空成就如來の四親近菩薩の中の金剛業菩薩・金剛牙菩薩・金剛拳菩

薩。内供養菩薩(東北隅)の金剛舞菩薩。外四供養菩薩(東北隅)の

金剛塗香菩薩。

四天柱絵三十二尊について、尊名の判る以上の諸像名は略称を用い、尊







挿図4 金剛焼香菩薩  
仁和寺版

挿図5 金剛燈菩薩  
仁和寺版

挿図6 西南柱  
中段北面部分

挿図7 宝波羅蜜菩薩  
仁和寺版

則性を認めることが出来るであろう。即ち、

〔四波羅蜜菩薩〕 上段下部（南北の面）

〔四摂菩薩〕 中段上部（東西の面）

〔内四供養菩薩〕 中段下部（南北の面）

〔外四供養菩薩〕 中段下部（南北の面）

〔四親近菩薩〕 上段上・下部、中段上部（東西の面）

右の様にまとめられる。以上の諸点を考慮し、次に尊名未定の六尊（表1・イ―へ）を順次検討する。

イ 西南柱・中段北面（挿図2の8）

西南柱では此尊のみが剝落が激しいため尊名が決められなかったが、西南柱に描かれる金剛界三十七尊の東位の尊像八尊のうち、尊名の見当らないものは外四供養菩薩の金剛焼香菩薩だけであるから、此所に描かれていた尊像は金剛焼香菩薩であると考えられる。しかし、同菩薩と推定される像が東北柱中段（挿図2の23）に描かれている。東北柱には此像以外は西位の尊像が描かれており、外四供養菩薩としては金剛燈菩薩が描かれると配置法としては整然とする。東北柱の像の持物の形状は、

高雄本の金剛焼香菩薩（挿図4）・金剛燈菩薩（挿図5）の持物と比較すると焼香菩薩の持つ香炉に近いので、金剛燈菩薩とするよりは金剛焼香菩薩とした方が無理がない。更に本図の彩色のうち剝落を免がれて残存する小部分の中に、高雄本の金剛燈菩薩の持つ燈器の本体と考えられる部分（挿図6）が見えるので、此処に描かれていた尊像は高雄本の金剛燈菩薩と同形の像であったことは間違いないであろう。この推定に基づけば、西明寺四天柱絵の作者は、外四供養菩薩を四天柱に配置するに当り東位の像（焼香）を西位の柱に、西位の像（燈）を東位の柱に、東西を逆に誤まって配置したことになる。青蓮院の白描金剛界諸尊図様にも此の場合と同様に金剛焼香菩薩と金剛燈菩薩の二尊について尊名を取違えて註記していることが、前出の柳沢氏の論文（註5）に指摘されている。この二尊は、長い柄の付いた持物の形も、其を両手で持つ姿形もよく似ていて間違え易い像容であるから、此の二例は単純なミスの偶然一致したに過ぎないものと考えられることは出来るが、一方、両者の類似には金剛界諸尊の像形に関する系統問題がかくされている可能性もあり、検討する必要がある。何れにせよ本像は金剛燈菩薩としておく。

ロ 西北柱・上段南面（挿図2の11）

西北柱（南位）上段に位置する本像は、前述の配置法から見れば四波羅蜜か四親近の両者のうちの一尊であったと考えられる。西北柱に描かれた八尊のうち、五尊は尊名を比定出来たが宝波羅蜜菩薩（四波羅蜜）、金剛光菩薩（宝生如来の四親近）、金剛鬘菩薩（内四供養）の三尊は該当する像が見つからぬのであるから、前二者の何れかが本図に相当する。ところで表1で問題にするイーへの六尊のうち、尊形が剝落も少なく明瞭に描かれていて、尚且つ尊名が推定出来なかったのは（ロ）（西北柱上段北面、挿図2の12、図版I）の像だけであったが、この像は着衣の形式から見て四波羅蜜像ではないので、残る宝波羅蜜菩薩が此処に描

かれていたと推測できる。確かに四天柱に配置された四波羅蜜菩薩は三体あり、其等は西南柱（東位）に金剛波羅蜜（東）、東北柱（西位）に法波羅蜜（西）、東南柱（北位）に羯磨波羅蜜（北）に適切に配置されており、西北柱に描かれるべき南位の宝波羅蜜は他の柱には見出されず、描かれた三尊の四波羅蜜像のみが襠褌衣を着けていることから判断すると、此処に描かれていた像が宝波羅蜜菩薩であったとして誤りはないであろう。像形を推測する参考として高雄本（仁和寺版）の図（挿図7）を掲げる。

ハ 西北柱・上段北面（図版1、挿図2の12）

本像は前節において金胎仏画帖の金剛牙菩薩（挿図8）に像形が似ていることを述べておいたが、本節の初めに尊名の判った尊像の位置を検討した結果、四本の柱は各々東西南北の一方位の尊像のみ八尊を描くものであることが判り、成身会北輪の不空成就如来の四親近菩薩の一つである金剛牙菩薩は南位の尊像を配置してある此の西北柱に描かれるよりも北位の尊像が集められている東南柱に配置されるに適わしい尊像であると言える。北位の東南柱には既に金剛牙菩薩と判る像が中段に存在するので、本像が金剛牙像ではないことは確かである。本像が描かれた位置から考え四波羅蜜か四親近像の何れかと推定されるが、襠褌衣を着ていない像容から考え四波羅蜜系の尊像ではないので、四親近の中の一尊と考えられる。西北柱の四親近像のうち尊名が未定であったのは金剛光菩薩のみであるから、本像が其に相当する筈であるが、前節に触れた様に本像

挿図8 金剛光菩薩  
金胎仏画帖

挿図10 金剛牙菩薩  
金胎仏画帖

挿図9 金剛光菩薩  
仁和寺版

挿図11 金剛光菩薩  
伝真言院曼荼羅

挿図12 金剛鬘菩薩  
仁和寺版

挿図13 金剛護菩薩  
仁和寺版

挿図14 金剛鈴菩薩  
仁和寺版

の手勢が通例の金剛光像とは異なっていて本像を同菩薩と決定出来ない。ところで金剛光菩薩の像容については、秘蔵記は「肉色。左手拳。右手持光日形」と記し、高雄本には此の表現に合致した像形の像（挿図9）を掲げている。これは本像とは全く異なる像形である。一方、金胎

仏画帖には「肉色左手拳右手持日光形」と秘蔵記と殆んど同じ字句を記すにも拘わらず、其処に描かれる図像（挿図10）は胸前に合わせる両掌の中に日輪形を挟んで持つ像である。此と同じ金剛光菩薩は教王護国寺蔵の伝真言院曼荼羅の成身会に見え（挿図11）、平安時代に淳祐が撰述した『金剛界七集』の同菩薩の項も此と同じ像容の金剛光菩薩を説いていると考えられる。同集には「肉色、二手持日輪当前、以手押日輪也」と述べ、其に続けて秘蔵記の説を異説として引用している。<sup>(12)</sup>ところで、日輪を両手で挟む像において、持物である日輪だけを省略した像容を考えると、其は本像に良く似た像形をしている。故に、本像は金剛光菩薩であると積極的に断定し得る根拠は弱いが、金剛光菩薩を表わす意図を以って描いた像であると推定しておく。

ニ 西北柱・中段南面（挿図2の15）

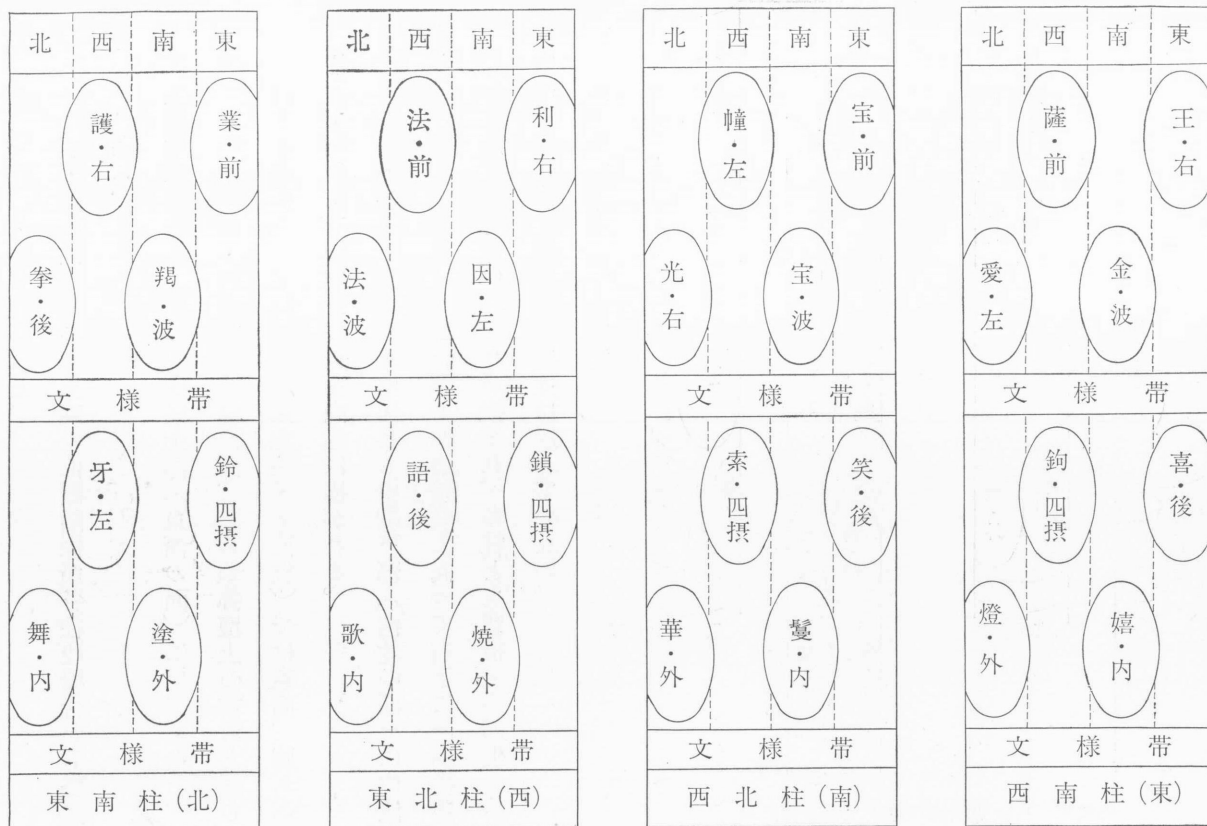
此迄の尊名の検討により西北柱において尊名の決まらぬ個処は此処のみであり、比定出来ずに残された尊像は南位の内四供養菩薩・金剛鬘菩薩である。内四供養像は西南柱に金剛嬉、東北柱に金剛歌、東南柱に金剛舞と何れも各方位に適わしい柱に描かれているので南位の此柱に描かれていたものは金剛鬘菩薩であったと推定してよいであろう。彩色が剥落しているので参考に高雄本の同像（挿図12）を掲げる。

ホ 東南柱・上段西面（挿図2の26）

北位の尊像を描く東南柱の中で尊名が比定出来ない個所は上段の（ホ）と中段の（へ）の二つある。又、金剛界成身会の北位の菩薩八尊のうち尊名比定がされずに残る菩薩像は金剛護菩薩（四親近の一）と金剛鈴菩薩（四摂）の二尊である。此節の初めに表の検討から、四親近と四波羅蜜が上段に描かれることが判るから、上段に描かれている本像が金剛護菩薩であると考えられる。同菩薩は不空成就如来の上方に位置し、秘蔵記には「青色。二手各舒頭指。自余指屈揚当腋側」とあり高雄本（挿図13）は大体この記述に合う像を描くが、頭指はあまり伸ばしてはいない。本像の身色は青色であることも本像が金剛護菩薩である可能性を強めている。

へ 東南柱・中段東面（挿図2の29）

三十二尊のうち尊名未定の尊像は本像のみであり、四天柱上の尊像に



挿図15 西明寺三重塔四天柱尊位展開図

比定されずに残された尊名は、四摂菩薩の中の北方に位置する金剛鈴菩薩唯一尊だけであるから、此が本像の尊名であると言うことになる。同菩薩については、秘蔵記も金胎仏画帖も「青色。取鈴」とあるのみであるが、左手は拳にして腰に当て右手は胸前に持ってゆく像形を高雄本（挿図14）は描き、本像は高雄本に近い像形と秘蔵記の通りの青色の尊像に表わされている。此等の点の一致から、右手の持物は剝落のために明瞭ではないが、本像は金剛鈴菩薩を描いたものとして誤りはないであろう。尚、金胎仏画帖には左右の手とも腰に当て左手には三鈷鈴を取る像を描いており、本像とは系統が異なるものであることを示している。

以上の様に尊名が未定であった六尊について尊名を推定したので、四天柱の上段と中段の三十二の円相に描かれた三十二尊の尊名はすべて比定することが出来た。その結果、三十二の円相に描かれていたものは四波羅蜜菩薩（四尊）、四仏の四親近菩薩（十六尊）、内四供養菩薩（四尊）、外四供養菩薩（四尊）、四摂菩薩（四尊）だけで、佐和博士が存在の可能性を予測した四神は描かれておらず其の代りに四波羅蜜菩薩が描かれていることが判った。

#### 四 諸尊の配置法

前節までに三十二尊の尊名と位置を比定出来たので、三十二尊の配置の状況を展開図（挿図15）により整理し諸尊の配置の仕方を眺めると、前節の冒頭において要約した配置法よりも更に詳細なルールに則り諸尊

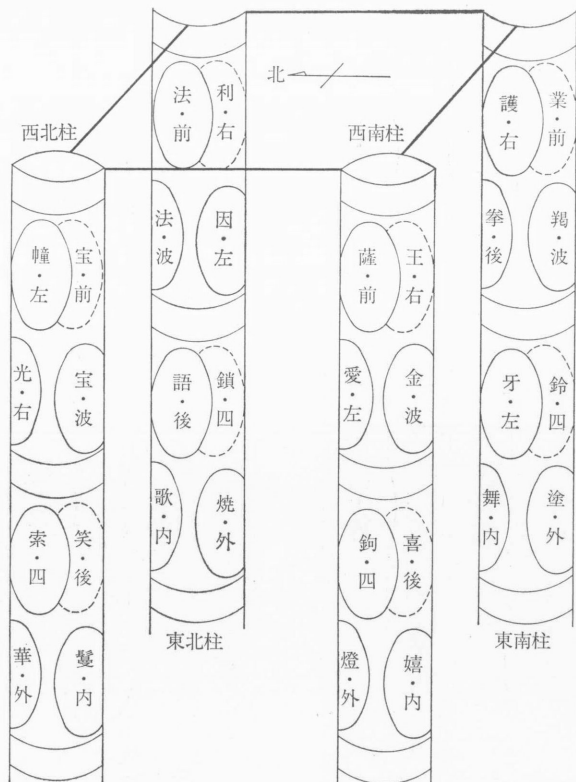
が描かれていたことが考えられる。

先ず、四摂・内四供養・外四供養の位置関係が各柱の場合とも整然としてゐる。即ち、

1 四摂菩薩は四尊とも各柱の中段上部（東西の面）に位置を占め、西側の柱（西南柱・西北柱）では西面、即ち須弥壇上の本尊と同じく西向きに描かれ、東側の柱（東北柱・東南柱）では東面、即ち両者揃って本尊に背を向けて東を向きに描かれる。

2 内四供養・外四供養両菩薩は何れも中段下部（南北の面）に位置を与えられ、四本の柱の場合とも四摂菩薩に向つて右下に内四供養、同じく左下に外四供養菩薩が描かれ、各柱とも四摂・内四供・外四供の三尊の位置関係の規則性は崩れていない。

次に四波羅蜜菩薩については



挿図16 西明寺四天柱三十二尊配置略図

3 四波羅蜜の四尊は各柱の上段下部（南北の面）に描かれる。現在は南面に三体（西南柱・西北柱・東南柱）あるが、北面に一体（東北柱）のみ描かれるので製作に当たり或は配置を誤ってしまったことも考えられる。

以上の検討により各柱は四波羅蜜・四摂・内四供養・外四供養の四尊が配置されたので残る四面に四親近菩薩が各々描かれることになる。通例の金剛界曼荼羅における四仏と其の四親近菩薩十六尊とは正面向きの尊像として表わされるが、教義の上では、教王護国寺蔵の敷曼荼羅に見られる如く大日如来の方を向いているものであるから、四親近菩薩のうち中輪に近い菩薩（金剛薩埵・宝・法・業）を、大日如来に対して四仏の「前」に在る菩薩とし、中輪に最も遠い菩薩（金剛喜・笑・語・拳）、即ち四仏の背後に居る菩薩を「後」の菩薩とし、同様に四仏の右に位置する菩薩（金剛王・光・利・護）を「右」の菩薩、四の左に描かれる菩薩（金剛愛・幢・因・牙）を「左」の菩薩と言う表現が取られる。四天主で四親近像のために残された四ヶ所の場所は、上段上部二面、上段下部の四波羅蜜の背後に一面、中段上部の四摂菩薩の背後に一面である。

前・後・左・右の各菩薩毎に考察すると、「前」の菩薩のみが各柱の上段上部東西の面に描かれるが後左右の各菩薩像群とも四尊のうちの一、二尊が他と別の部位に描かれていて配置の規則性を乱している。即ち、「右」の菩薩は金剛王・利・護の三尊が上段上部、「前」の菩薩の背後に表わされるが、金剛光のみが上段下部に位置を外して描かれる。又、「後」の菩薩は中段上部に金剛喜・笑・語の三尊が何れも四摂菩薩の背後の位置に表わされるが金剛拳像一尊は上段上部に配置されている。

「左」の菩薩は上段下部に金剛愛・因の二尊があるが一尊（金剛幢）は上段上部、一尊（金剛牙）は中段上部に飛出している。四尊のうち三尊が同じ部位に描かれている「右」の上段上部、「後」の中段上部が両菩薩群が本来描かれるべき位置であると考えられるから、群から離れていて「右」（上段下部）と「後」（上段下部）を其等の本来の位置に戻して考えると、「左」の菩薩の描かれる位置は上段下部しか残されていない。この様に見て来ると配置の規則性は相当に明瞭である。即ち

4 四親近菩薩の中の「前」と「右」は上段上部（東西の面）に背中合せの位置に描かれる。

5 四親近菩薩のうち「左」の菩薩は上段下部（南北の面）に四波羅蜜菩薩の背後の位置に描かれる。

6 四親近菩薩のうち「後」の菩薩は中段上部（東西の面）に四摂菩薩の背面の位置に描かれる。

此の様に推定出来るであろう。挿図15からも推察出来る様に、各柱とも

上段上部……「前」と「右」の菩薩

上段下部……四波羅蜜と「左」の菩薩

中段上部……四摂と「後」の菩薩

中段下部……内四供養と外四供養

の如く二組の組合わせが窺がえる。

此等は尊位の位置の高低のみに注目したことにより判明したものである。そこで更に各組の東西或は南北の方位を考慮して尊像の配置を見直す必要がある（挿図16）。挿図15で整然としていた四摂・内四供養・外四供飛の配置を見ると本尊大日如来の前方にある二柱（西南柱・西北

柱）を一組に、後方の二柱（東北柱・東南柱）を別の一組とし、二柱ずつ同じ配位を行なっている。この配置の原則を参考にして四波羅蜜を考えると、西北柱の宝波羅蜜（上段南面）を反対の位置（同北面）に移すと、四尊は須弥壇の左右外側に二面ずつ並ぶことになる。即ち本尊の左側（南側）の柱（西南柱・東南柱）に各々南面に、本尊の右側北側の柱（西北柱・東北柱）に各々北面にと四尊が南北の方向で外を向いて描かれる。従って四波羅蜜菩薩と同部位に対置される「左」の菩薩は、南北の向きに二尊ずつ本尊を囲む様に須弥壇の中を向いて向い合い、四摂菩薩（中段上部）と背中合わせに置かれる「後」の菩薩も此の方は東西の位置に二尊ずつ須弥壇の中を向いて本尊を囲む様に描かれる。残るは上段上部（東西の面）の「前」と「右」の菩薩の組のみであるが、「前」の菩薩は西を向くものが二尊（西南柱・東北柱）と東を向くものが二尊（西北柱・東南柱）に分かれてしまい、規則的に配するには二尊を動かさねばならないことになり、どちらの配位にも決定させる根拠がない。故に、現在の配位からは、尊像の位置の高低・方位の両要素を用いた立体的な配置の規則を導き出すことは困難である。

この四天柱絵が描かれた鎌倉時代中頃には仏教図像学は豊かな成果を著々と挙げて来つつあったし、四天柱絵の諸尊配位の規則性を見ても、柱絵製作を推進した発願者等には諸像配置に其等の成果を活用した一定のきまりを設定していたと考えられる。西明寺の西北柱における金剛光菩薩（右）と金剛幢菩薩（左）の位置、更に金剛牙菩薩（左）と金剛拳菩薩（後）の位置の如く、両者の位置を交換すると配列が整然とすることは、尊像を柱に描く段階で発願者等の意図が伝わらず喰違いを生じた



ことを示しているであろう。これに似た例は、教王護国寺の縁起や変遷を記した「東宝記」にも見え、鎌倉時代の永仁年間新造になる塔の柱絵について、尊像の位置や持物が通説のものとは異なることを指摘しているから、数十尊の尊像を描き並べるときは位置や持物の表現が手本通りではない尊像も応々にして描かれてしまったことを物語る。又、実際に執筆を担当する絵仏師や絵師たちは、描くべき尊像に対しては図像学的検討などは詳細には行なわずに仕事を進めて行く製作態度が、大寺院の仏画製作の場合にも見られることを「東宝記」の記事や西明寺の四天主絵は示唆している。

### おわりに

堂塔内の柱に諸尊を描く例は、滋賀県の石山寺多宝塔、高野山の金剛三昧院多宝塔をはじめ、法界寺や大分の富貴寺の阿弥陀堂、更に西明寺の場合に似て金剛界三十七尊のうち大日如来を除く三十六尊を四天主に描く広島県福山市の明王院五重塔などに比較的多く見られるが、天台宗系の寺院に多い三重塔に描かれた四天主絵の作例は殆んど遺っていないので、西明寺三重塔柱絵の存在は貴重である。他に比較すべき作例がないため、四天主に三十二尊の金剛界菩薩が描かれることが、三重塔に関して一般的であったか否かは明らかではなく、従って西明寺三重塔が金剛界三十七尊中の三十二尊を配置した方法が特殊であるか否かも推定が出来ない。しかし、三十二尊を配列する際は当然規則的に整然と位置づけたであろうことは推測されてはいたが、その具体的な情況が西明寺四天主絵に則して明らかに出来た。

三十二尊の像形は、二十二尊までが持物・手勢とも高雄本に一致しており、とくに金剛界八十一尊曼荼羅（根津美術館本）と高雄本と像形に差が見られる四親近菩薩では、殆んどすべてが高雄本系の像に描かれている点が注目される。像形の点で特色を見せたものは四親近菩薩にあっては金剛光菩薩。持物に特色が見られたものは四摂菩薩の中の金剛鉤・金剛鎖の二尊と外四供養菩薩のうちの金剛塗香菩薩である。とくに塗香器は盤の上に明らかに香炉様のものを描いており、金剛光菩薩、或は金剛燈菩薩・金剛焼香菩薩の位置の問題とともに西明寺四天主三十二尊の像形の系統を探る上で問題とすべき特色と言える。

三十二尊が東西南北の四方に分類され、各々が一本の柱にまとめて描かれたもので、三十二尊は金剛界三十七尊から大日如来と四仏を除いた尊像すべてを含んでいることが判った。現在は、四天主を四隅に持つ須弥壇上には大日如来の彫像が一尊のみ安置されており四仏の像は置かれていないのであるが、須弥壇の大日如来と四天主の三十二尊を合わせれば金剛界の中心部分の殆んど仏菩薩が表わされることになるので、三重塔建立当初には、大日如来の周囲の須弥壇上に四仏（阿閼如来・宝生如来・無量寿如来・不空成就如来）の彫像も造立され安置されていたのではないかと推測出来る。しかし西明寺に伝わる資料からは此の事を裏付けることは出来ない。以上の問題は、今回は触れずに残した様式的検討とともに次回に検討することとする。

### 註

1 明治33年4月7日に国宝（旧）に指定され、昭和27年11月22日に更めて新国定に指定された。



図版要項

- 2 佐和隆研「滋賀の西明寺」(『仏教芸術』55) 昭和39年8月。
  - 3 石田茂作『日本仏塔』解説。昭和44年3月、講談社。
  - 4 田中日佐夫『近江古寺風土記』。昭和48年4月、学生社。
  - 5 柳沢孝「青蓮院伝来の白描金剛界曼荼羅諸尊図様」上(『美術研究』241)、昭和40年7月。
  - 6 大村西崖『仏教図像集古』(大正10年11月)の中に「金剛界諸尊形像」として、諸家に分割所蔵される以前の姿が窺える。
  - 7 大藏経図像 第1巻12頁。
  - 8 大藏経図像 第1巻191—203頁。
  - 9 明治3年、仁和寺にて開版。大正2年大村西崖『三本両部曼荼羅集』を刊行した際に再び印行。
  - 10 田中一松「金胎仏画帖と宅磨為遠」(『大和文華』12) 昭和28年12月。
  - 11 榎尾祥雲『曼荼羅の研究』225頁、昭和2年8月 高野山大学出版部。
  - 12 『金剛頂瑜伽中略出念誦経』、大正大藏経第18巻223頁。
  - 13 大正大藏経第1巻193頁(『金剛界七集』)。
  - 14 果宝撰「東宝記」第二(『続々群書類聚』12巻34頁)。  
今拝見聊有不審、乾柱四撰尊座位錯乱歟、坤柱光并持物可三日輪二画三月輪一誤也、良柱梵天像異「常途説」有疑矣。
  - 15 『国宝西明寺本堂及塔婆修理工事報告書』 昭和14年2月。
- 本稿を草するに当り当東京国立文化財研究所の柳沢孝主任研究官より御教示を頂戴しました。記して感謝の意を表します。
- (付記) 本稿は昭和四十八年度文部省科学研究費による一般研究「法華経絵の研究」(研究代表者・宮次男)の研究成果の一部である。

一 三重塔四天柱絵 西北柱 金剛光菩薩像(原色刷) 滋賀西明寺蔵

二 同 東北柱 法波羅蜜菩薩像 同

三 同 柱絵着色 同 金剛語菩薩像 同

四 同 柱絵着色 同 円相高 各二八・一糎 同 金剛焼香菩薩像 同

五 同 同 円相高 二八・五糎 同

六 青銅仏坐像 一—五 関口正之「西明寺三重塔四天柱絵金剛界諸菩薩像」参照 東京個人蔵

七 金銅菩薩立像 青銅造 全高二八・五糎 東京個人蔵

八 金銅菩薩立像 a 正面 b 背面 c 背面 金銅造 全高一八・七糎 東京個人蔵

九 金銅觀音菩薩立像 a 正面 b 背面 金銅造 全高四七・〇糎 東京個人蔵

六—九 松原三郎「中国仏像様式の南北—再考—」参照